

# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会  
〒136 東京都江東区  
夢の島3-2  
都立第五福竜丸展示館内  
電話 03-3521-8494

東京二三区の西端、武蔵野台地上に位置する杉並区には、三万年以上前から人々が生活していました。そして、明治時代まで江戸の近郊農村だった杉並は、関東大震災以降、甲武鉄道(現JR中央線)が開通し、国内でも有数の規模で行われた旧井荻村地区の区画整理事業による宅地化が完成すると東京の近郊住宅地として発展しました。特に、井伏鱒二らの文士たちや、学者、戦前では軍人など当時のいわゆる文化人が多く移住してきました。「文化区杉並」と呼ばれるゆえんです。

## 水爆禁止署名運動杉並協議会のこと

武士田 忠

今からちょうど四〇年前、第五福竜丸の被爆により、いわゆる「魚恐怖」が起きました。日本人の重要なタンパク源であった魚が食べられないことは大変深刻な問題でした。杉並区では、区議会がいち早く「水爆の実験行為禁止に関する決議案」を全会一致で採択しました。またこれと前後して、杉並区立公民館で行われた集会である魚屋さんが、「このままでは魚屋はつぶれてしまう。」と激しく訴え、これを契機に水爆禁止署名運動杉並協議会が結成されたのです。この時の議事録には、水爆の問題が遠く離れた問題ではなく、子供や家庭の身近な問題であることを訴え、運動の純粋さを理解してもらおうため、あえて「平和運動」という言葉を使わず、また「原水爆」とせず「水爆禁止」とした旨が記されています。

月で組織は全国規模に発展しました。そして一年後には第一回の原水爆禁止世界大会が開催されるに至りました。むろんこの運動の中心に国際法学者の安井郁(当時杉並区立公民館長)という人がいたことが杉並から運動が大きく広がっていった要因でしょう。この運動を支えた土壌として、東京の近郊住宅地として発展してゆく中で、作家や学者、ジャーナリストなどいわゆる文化人が多く移り住んでいた杉並の土地柄もあったと思います。しかし、「魚が食べられない」というきわめて単純で身近な、日常生活に密着した深刻な問題であったからこそ、運動がそこまで大きくなったのでしよう。わずかの一年の間に、杉並区から全世界に広がったこの市民運動の発祥の地として、杉並区立公民館のあった場所(現荻窪体育館)には、記念碑が建てられています。

(杉並区立郷土博物館学芸員)



マーシャル諸島共和国カミナガ大使夫妻

「福竜丸は私に忘れられない印象を残しました。」。十二月六日、展示館を訪れたマーシャル諸島共和国大使館のマック・カミナガ大使は来館者ノートに書き記しました。展示館でひらかれていた島田興生さんの写真展をぜひ見たいと訪問されたもので、五歳になる息子さんを連れ夫婦での来館、島田谷子さんが案内しました。

## マーシャルの大使も見学

「世界のヒバクシャ」などを寄贈、大使は福竜丸へのメッセージを後日とどけたいと約束されました。

「写真の中から声が聞こえてくるよう。」写真展十二月二十八日まで  
船首から船尾いっばいに船に抱かれるように展示された「還らざる楽園・ビキニ」の写真展は来館者が最も多い十一月(三万名・一五〇団体余)、見つめる人びとに鮮烈な印象を与えています。江東区八名川小学校三年生は思い思いに写真の説明を声をだして読み、障害の痛ましい子どもたちの写真をくいくいするように見つめ、けんめいに説明を書き写しました。

「生協まつり」に参加した東京都生協平和活動委員会は二回にわたり見学会をよびかけ、また、生活クラブ生協のグラフィック雑誌「生活と自洽」十二月号は、表紙からビキニ被曝四〇年の特集記事と写真で、写真展を紹介しました。



ビキニの子どもたちの写真にみいる

感想ノートには「写真の中から声が聞こえてくるよ」など共感の声が多数記されています。

## 杉並区博物館で企画展

十一月三日から二十七日まで、東京杉並区の郷土博物館で企画展「杉並の水爆禁止署名運動」が開かれました。ビキニ事件40周年にあたり、あらためて第五福竜丸の被災の意味を考え、事件を契機におこった市民的な原水爆禁止運動の原点を市民と共に再認識しようとするもので、協会からも福竜丸の航海日誌、焼津港への電文、日めくりカレンダー、ガイガー検数管、久保山愛吉さんの船員手帳、久保山さんへの激励の手紙、漁具等を貸し出し協力しました。展示会ではビデオ「ビキニの海は忘れない」「第五福竜丸」も上映され、原爆の図第十部「署名」も展示されました。八月の焼津市歴史民俗資料館での「福竜丸特別展」への協力とともに40周年にふさわしいものでした。

## 評議員会ひらく

十一月十二日、協会の94年度評議員会が開かれ16名の評議員・理事・監事・顧問が出席、「協会の活動を発展させるために」を主要議題に「節目の年にあたっての中・長期的視野に立つ方策」を審議しました。



学内講義室でロンゲラップの写真展

我が大学では、十一月三日から四日間にわたり大学祭を行ないました。私たち教育研究会は、そこで、ひとりでも多くの人に第五福竜丸のことを、ロンゲラップ島の

### 大学祭を通じて平和を願う

#### 山梨学院大学教育研究会

絶を訴えて欲しい、との思いから、『第五福竜丸とビキニ、ロンゲラップの人びとの写真展』を開催しました。

私たちは、年間を通じて、『平和学習』をテーマに、活動してきました。一月、長野の松代大本営跡を見学し、朝鮮人強制労働や、地元高校生の平和活動を学習、そして五月にはじめて夢の島公園へ行き、第五福竜丸を見ました。そこで詳しい説明を聞き、写真を見て、私たちは、はじめてロンゲラップ島の人々の存在を知り、とてもショックでした。私たちは、何も知らなかった。表面的な認識だけで歴史を解釈すると、いつも、弱い者は犠牲となり、長い歴史の流れの中で強い者に消されてしまっている。松代へ行った時もそう感じていました。そして、九月に広島へ平和学習に行きました。そこで、お話を伺い、平和公園を歩き

ながら、絶対に核なんていらない、私たち皆、心から平和を願うということが、どういうことなのか、とても考えさせられました。そうして大学祭の準備が始まったので、今年が、第五福竜丸の被爆四〇年であること、そして、ロンゲラップの人々のことを、一人でも多くの人に知ってもらいたいということとで、皆の意見が一致、ロンゲラップの人々のパネル写真を、お借りして展示をさせていただきました。はじめは、周りの学生の関心が薄く、地味な展示なので、なかなか足を運んでもらえず苦労しました。しかし、私たち、関係者一人ひとりの強い自覚のもとで、友人を連れ出し、その友人がまた他の友人を連れてくるということもできました。ただ漠然と見回ってもらうのではなく、こちらから積極的に説明役となって一緒に見ていき、中には、ロンゲラップの子どもの写真に釘づけのまま涙があふれてとまらない女子学生もいました。

模擬店やコンサートなどのように、決して派手なことではないけれど、これが、本来、大学祭のあるべき姿ではないかと、激励して下さる方もいました。大盛況とはならなくとも見に来てくれた一人ひとりが、関心を持ち、真剣に平和とは何かを問い直していく、その私たちの心に共感してくれたこととで、大変、意義のある、大学祭となりました。

見に来てくれる友人たちと同時に、教育研究会の私たち一人ひとりが、私たちにできることは何かを学ぶ、よい機会となりました。平和学習を通じて、平和を願う心を各自が持っているだけでは、自己満足に過ぎない。その心を、自分の周りの人にも知ってもらって

はじめ、平和学習の取り組みとなるんだ。戦争も知らない、被爆もしていないから、私たちは、何も知らないし、関係ない、のでは、私たちが、次代へ語り継ぐ後継者としての大きな責任と義務があるため確認しました。

「原爆は、原爆では破壊できない。一人ひとりの叫びによってしか、なくすことはできない」という言葉を聞いたことがあります。私たちは、これからも、平和を願う一人ひとりとして、積極的に活動してゆきたいと思えます。

### 「還らざる楽園・ビキニ」の四〇年へ連載下 メジャト島―厳しく困窮した移住地の生活

#### 島田興生



昨年十二月末から今年の一月末にかけての約一カ月、一九八五年から九一年九月まで妻とふたりで六年間暮らしたマーシャル諸島を二年三カ月ぶりに訪ねた。わずか二年ほど離れていた間にマーシャルの変化で気になったこ

食料不足で子どもたちにいつも慢性的な栄養不足が続くメジャト島。

とも多かった。住んでいた時には余り気がつかなかったマーシャル人の金に対するこだわりが一段と厳しくなったように思われた。特に少しでも金に余裕のある所からはいくらかでもむしり取ってやるというようなせこさが眼についた。金銭価値などにとらわれず、金に助け合ってきた島社会特有のおおらかさを知っているだけにちよっと耐え難い感じだった。それと同時に、ロンゲラップの人々、とくに島のリーダーであるアンジャインさん一族の暗い雰囲気も気になった。マーシャルの首都マジュロ島に着くとすぐにネルソン・アンジャイン元ロンゲラップ村長に連絡を取った。ロンゲラップ島民が残留放射能禍から逃れて疎開生活をおくっているメジャト島に一緒に行つて貰う

ためだった。マジュロの私のホテルに現れたネルソンさんの顔には言い難い苦悩と希望のなさが表れていた。石垣島の白保の空港建設反対運動をしていた魚住けいさんが十年ほど前にネルソンさんとマーシャルで会った時「本当に希望を失った人の顔というのを初めて見たわ」と言っていた。そのネルソンさんは九三年六月に、一族の要で国会議員だったチェトン・アンジャインを亡くしたことが、またその彼が中心になって行ったメジャト島への移住で、彼の死後、移住地での島民たちの生活がその後想像以上に厳しく困窮していることが背景にあるように思った。

この何回目かのメジャト島へのしんどい船旅をしながら、私はこの輸送問題を解決することが何よりも優先課題だな、と思った。もう少し安全で快適な船が用意でき、定期的に運行出来れば島民たちの苦悩は相当軽減されるに違いないし、残留放射能の待つロンゲラップ島に無理して帰島しようとする動きも収まるかもしれない。この七月、拙著「還らざる楽園」の出版パーティの席で、このメジャト島にディーゼル船と運行維持のボランティアを贈る「ブンブンプロジェクト」を発表した。目算も何もなかったが、言い出してしまうやばやらざるを得なくなるだろう、と言う捨て鉢的計画でもあった。それだけに具体化するためには多くの難問が前途に横たわっている。しかし、この写真展を通じて、また今後の巡回写真展でも支援を訴え続けていかねばならないと思っている。

(フォト・ジャーナリスト)